

単なる下端部にすぎない形態のものも存在するのである。従来の編年観にそえば、前者は宮山型、後者は都月型として位置付けられることとなる。ここに例示した底部のうち、47・49の形態は器台的な形状の名残をとどめているとも言えよう。また、45も底面近くまでの赤色塗彩の存在によって、器台的な機能を有することは明らかであろう。「都月型」は、丹彩が最下段突帯をわずかに下にこえた範囲にとどまることが指摘されており、「少なくともその部分を土中に埋没樹立させるという意識のもとにそれが製作⁽⁷⁾」されたと考えられるものである。今回紹介した他の底部では、表面に大きく摩耗を受けている製品が多いため、赤色塗彩の有無を検証できないが、今後この方面からのアプローチにも留意すべきであろう。

大市墓と岡山市都月一号墳については、その前後関係をめぐって二説あることは、よく知られている。しかし、岡山県下の資料に疎い筆者には、その方面の資料と比較検討する力量に欠けており、今後、より厳密な対比が必要とされるであろう。今回紹介した遺物をそれぞれの説の論旨に沿い、位置付けを試みると、本陵を含む三者の編年観はより複雑化するのである。大市墓における宮山型の実態が明らかではない現在、本陵と厳密なる対比はできないが、墳丘段築の構造や、後円部・前方部頂の方丘等、以後の前方後円墳の展開過程のなかで選択されていく要素の量を加味すれば、従前より大市墓に後出すると考えられていた本陵の関係を、逆転させることは難しいように思われるのである。(福尾正彦)

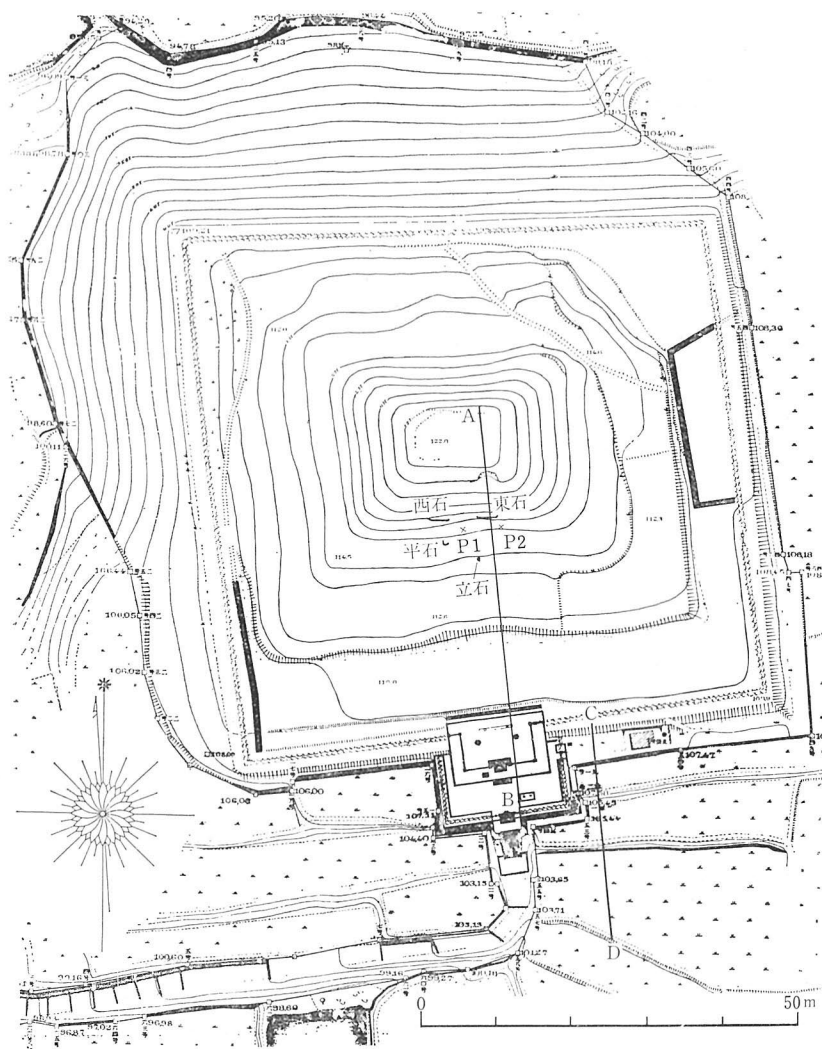
註

- (1) 石部正志・田中英夫・宮川 渉・堀田啓一「畿内大形前方後円墳の築造計画について」『古代学研究』八九 古代学研究会 一九七九年
- (2) 註1に同じ。名称としてベストとは思わないが、他に適当なる用語もうかばないので、便宜上使用することとする。
- (3) 中村一郎・笠野 毅「大市墓の出土品」『書陵部紀要』第二十七号 宮内庁書陵部 一九七六年
- (4) 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』第一三卷第三号 考古学研究会 一九六七年
- 春成秀爾「箸墓古墳の再検討 2 箸墓古墳の埴輪」『国立歴史民俗博物館研究報告』第三集 国立歴史民俗博物館 一九八四年
- (5) 註4の春成論文に同じ
- (6) 註4の近藤・春成論文に同じ
- 高井健司「1号墳出土埴輪と都月b類」『岡山市七つ埴古墳群』七つ埴古墳群発掘調査団 一九八七年
- (7) 註4の近藤・春成論文に同じ

推古天皇陵の墳丘調査

推古天皇磯長山田陵(竹田皇子墓に合葬)は大阪府南河内郡太子町に所在する日本有数の方墳である。金剛山地から派生した台地上の丘陵の西端に立地するが、この付近は東西に傾斜しているため、北側と西側の部分が一〇メートル以上も崖状の斜面をなしている。周辺には本陵とともに梅鉢陵と総称される敏達天皇陵、用明天皇陵、孝德天皇陵、聖德太子墓も点在しており、磯長谷古墳群を形成している。

本陵についても、段築構成のあり方、貼石の有無、さらには墳丘上に



第7図 推古天皇陵調査箇所的位置 (1/1000)

おける大形石材の有無等に関する資料を収集するために、十一月二十日から二十二日、および三十日に調査を行った。

調査は、段築構成のあり方を知るため、墳丘の南北縦断面図を作成した(第2図1)。また、大形石材の有無については、墳丘南側斜面の一部の腐植土等を除去し、その存在を確認するとともに、その位置関係の確定に努めた。貼石と称されるものに関しては、その存在を記した報告文があるものの、現状では確認できなかった。

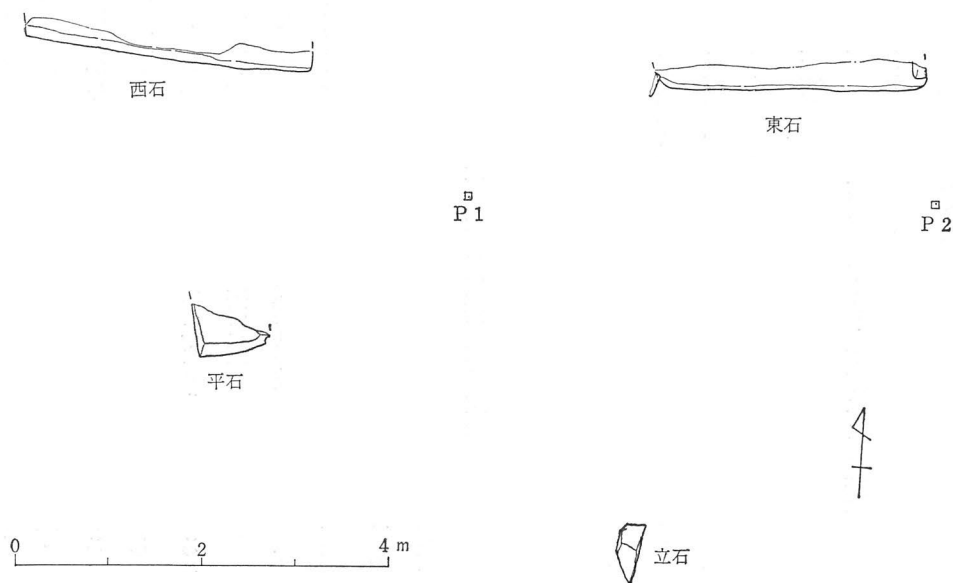
一、墳丘段築の調査

墳丘の南北縦断面図(第2図1)は、樹木等の関係もあり、主軸からやや東に偏したところで作成した。また、拝所付近では、旧地形も改変されているため、さらに東側によったところでも図化し、周辺地形との関連性の把握に努めた。

本陵は、等高線の乱れが東北隅付近で観察されるものの、他の部分では、比較的均整な姿を呈している。実地踏査すると、二面のテ

ラスがほぼ全周しているのが観察される。このことは、第7図の陵墓地形図においても明確に認めることができる。つまり、三段に築成していることが窺われる。縦断図作成箇所におけるテラスの幅は、下段で五・六メートルである。上段は、該所では流出土等のために明らかではなかったが、他の部分で計測したところ、二・五〜三メートルであった。一方、各段の傾斜面の長さ（斜距離）は、下から五メートル、三・四〜三八メートル、一二・六メートル（墳頂部南端まで）であった。三段目の部分が下二段に比して、高く築成されているのが、注目される。北方においては、法面をきれいに整形しているのが窺われるが、東方においては、一部を除き、とくに南半分において、自然地形のような状況を呈していた。また、墳頂部は平坦面をなしておらず、緩やかな丸みを帯びている。その南北幅は五・四メートル、東西幅は一〇・二メートルである。これらのデータをもとに、墳丘の規模を図上で再計測してみると、南北は、五八メートルとなる。東西については、今回は明確にしえなかったが、標高一一〇メートル前後を一つの目安としてみれば、五九メートルと計測することができ、きわめて正方形に近いプランを有する。三段目部分に関しては標高一一五メートル弱のところとすると、南北で二五〜二六メートル、東西で三三〜三四メートルとなり、顕著に長方形の形状を示しているといえよう。

墳丘外周の南面と東面には、広い平坦面が形成されている。縦断図作成部分では、幅八メートルにわたるが、南面においては周辺地形を参考



第8図 推古天皇陵の大形石材の位置関係 (1/80)

にしてみると、さらに六メートル、つまり一四メートルに及ぶものであったかもしれない。南面の平坦面においては、よく説かれるように葬送などの儀式との関連で理解することもできようが、東面については、その性格を明らかにしない。

二、墳丘上における大形石材等の調査

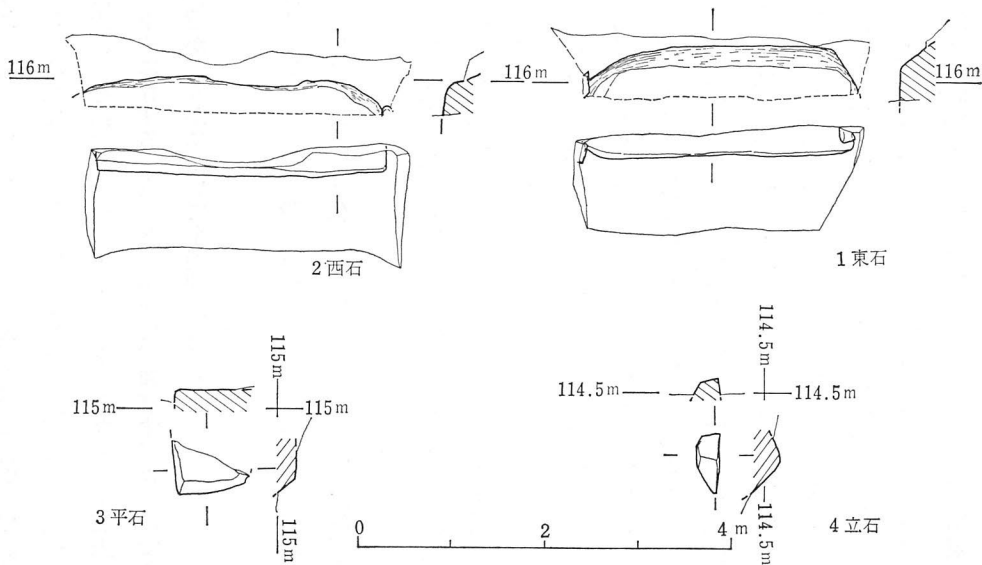
墳丘南斜面で、一部の腐植土等を除去したところ、本墳に関係すると思われる石材四個を確認することができた(第7・8図)。これらは、発掘して全貌をつかんだものではないため、正確な位置等、記述に「現状では」という一定の制約があることを予めお断りしていきたい。

検出された石材のうち、二個は三段目斜面の下位で東西に並行して検出された(それぞれ東石、西石と称したい)。残りの二石については、二段目上面のテラスで認められた。

東石と西石は、標高一一六メートル前後のところに、約三・五メートル離れ所在する大形の石材である(図版六1)。墳頂部中央の最高部(第7図の標高一二二メートルの地点)と東西に走る多くの等高線に対して直交するラインを主軸とすれば、そこからやや東に偏して位置することとなる。石の周囲の排土は、必要最小限にとどめたため、細部については不明の点も多い。両者ともに、前面を平滑に整えて垂直に立て、上面では左右前後に緩やかな円弧を描くという相似た形状を示す。東石の方が表面がより平滑に仕上げられている。石質はともに花崗岩である。それぞれをより細かく観察してみたい。

西石(第9図1)は、等高線に平行しないが、ほぼ磁北に対して直交する。本石の所在する付近は、陵墓地形図でみると、一一五・一一六メートルの等高線がやや墳頂部によっているように描かれている。現状でも上方からの滑落などのために若干傾かれたような状態を示し、実際の一一七メートルの等高線は、墳頂部方向により入り込んでいることには注意しておきたい。露呈した部分では高さ五〇センチ以上、幅三・一メートル以上を計る。前面と上面の境の稜線が波を打ち、東石に比してやや優美さを欠く石材である。奥に入り込む東端部分は確認したが、西端部分は追及しえなかった。この石材は堅固な盛土と思われる砂利混じりの暗黄色粘土で封じられ、西端部ではこの封土が厚く遺存したためである。が、現状では西端付近で、本石は上面が西に大きく下降気味なので、端部に近いことが察せられよう。東端部付近で、径一〇センチ前後の円礫が一個認められたが、栗石の可能性もあろう。

一方の東石(第9図2)は従来からその存在が知られており、その一部(前面と上面が交わる稜線部分)が露出していたこともある。等高線にはほぼ平行して位置し、排土した部分では高さ五〇センチ以上、幅二・九メートル以上である。東端は確認したものの、西端は前面のカーブからしてわずかに延びるのであろう。西石に比べて前面の幅がやや小さいことが注意される。前面の高さもボーリング棒による探查の結果では、掘削床面下三〇センチ以上あり、八〇センチ以上の高さを想定することができ。この石の東端、および西端付近では幅一五センチを越える角



第9図 推古天皇陵の大形石材の平面および断面 (1/80)

礫が検出されたが、これも栗石と考えられようか。この東石の稜線のレベルは一一六・二メートル弱であるが、西石では一一六メートル弱であり、東石の方が見かけ上、高く位置することになる。しかし、これらの石の下面、および石室床面のレベルを明確にできない以上、その相違の評価は控えるべきであろう。また、両者の前面のラインが平行しないことも注意されよう。

二段目テラスで認められた残りの二石に関しては、一石は西石の中央部のやや東側から南方三・一メートルの地点に前面を、また、他の一石は東石の西端付近から南に五・三メートルに前端を据えている。石質は、ともに花崗岩のようである。前者を平石、後者を立石として以下の記述を進めることとする。

平石（第9図3）は、本来テラスの部分に位置すると思われるものであるが、現在は上部からの流出土のために、北側部分は埋没している。ほぼ南北に主軸をとって位置し、現状で東西八〇センチ、南北六〇センチ以上を計る。本石は上面が標高一一五・二メートルのところで平垣に整えられている。露呈できた西縁部は直に落ちこみ、前面は斜傾している。当然のこととして、西石との関係が問題とされよう。平石上面と西石前面の排土床面との比高差は約四〇センチであり、西石の下面が平石上面のレベルに対応していることも考えられよう。

また、立石（第9図4）も周囲の部分が土中に埋没しており、正確な形状は詳らかにしない。主軸はやや東に偏しており、東面に若干斜め

に入り込む平垣面を有している。上面は一端、北側に向かって高くなつた後、下降する。現状で主軸の長さ六五センチ以上、横幅二五センチ以上である。最上部の標高は約一一四・七メートルとなり、平石上面から約五〇センチ下位に存する。東石との関連で、理解すべきものであろうが、原初の位置かどうかについても疑問は残されよう。

三、おわりに

以上、本陵において見られる段築構成と大形石材について、説明を加えてきた。ここでは、両者の関係等について若干の記述を試み、まとめとしたい。

まず、大形石材の性格を確認しておきたい。西石と東石は位置、形状、大きさ等からみて、横穴式石室関係の部材と見做して、まず疑問は生じないであろう。その石室内における具体的な位置は、墳丘の高さや墳頂部下までの距離などを考慮すると、玄室の天井や前壁の石材というよりは、羨道部の天井石と考えられるのである。とすれば、平石は、西側石室の羨道部の東側壁―前面の傾斜から見て羨門の可能性もあろう―の一部であろう。石室床面は他の古墳の例からして、二段目テラスに接続する可能性を鑑みれば、標高一一四・二メートル付近を目安とすることができ、平石は床面からの高さ一メートル前後を有することとなる。この数値は、やや低すぎる感もすることから、実際は二段目テラスを大きく掘り込んで羨道・墓道としていることも想定できよう。ちなみに、二段目テラスの南端と思われる箇所から、墳丘中心部までの水平距離は約一

六メートルを計測できる。立石については、先述のように、その性格付けに苦慮するところである。仮に原位置を保っているとすれば、東石室の羨道もしくは前庭部を構成する石材にでもなるのであろうか。

以上のように、本陵においては東西に並列する二基の石室の存在を想定することができ。しかし、墳丘の形態が当初の状態をとどめているとすれば、墳丘主軸に対して左右対称ではないことは、石室の位置する三段目プランが長方形であることもあって、奇異なことである。新たに石室を営建するにあたって、墳丘を拡張したことも考慮の範囲に入れるべきであろうか。

『日本書紀』によれば、推古天皇は竹田皇子の陵に合葬されたことが知られる。一方、大正十四年刊行の『山陵』には「此ノ陵嘗テ羨道ノ前面崩壊シ、羨門ヲ塞グ所ノ大石顛墮ス、里長燭ヲ秉リ、宝壙ニ入ル、廣サ方一丈五六尺許、上下四方盤石ヲ以テ疊ミ、内ニ石棺ニヲ安ス、左右相竝ブ、其ノ制、磨礪精巧ヲ極ム、右ハ推古天皇、左ハ竹田皇子ナリ」との記載がある⁽²⁾。これによると、横穴式石室内に二基の石棺が納められていたことが知られるのである。問題は、この石室が東西どちらに相当するかということであろう。ここでは、西石、東石の粘土などによる被覆状況、現在は観察されないが、東石上方の崩壊状況(第7図参照)、さらには現地における伝承などを参考とすると、東石を有する石室が該当する可能性が高いように思われる。このように考えることが許されるとすれば、今後、本陵の性格の規定にあたっては、西側の石室の存在も

考慮する必要がある。

(福尾正彦)

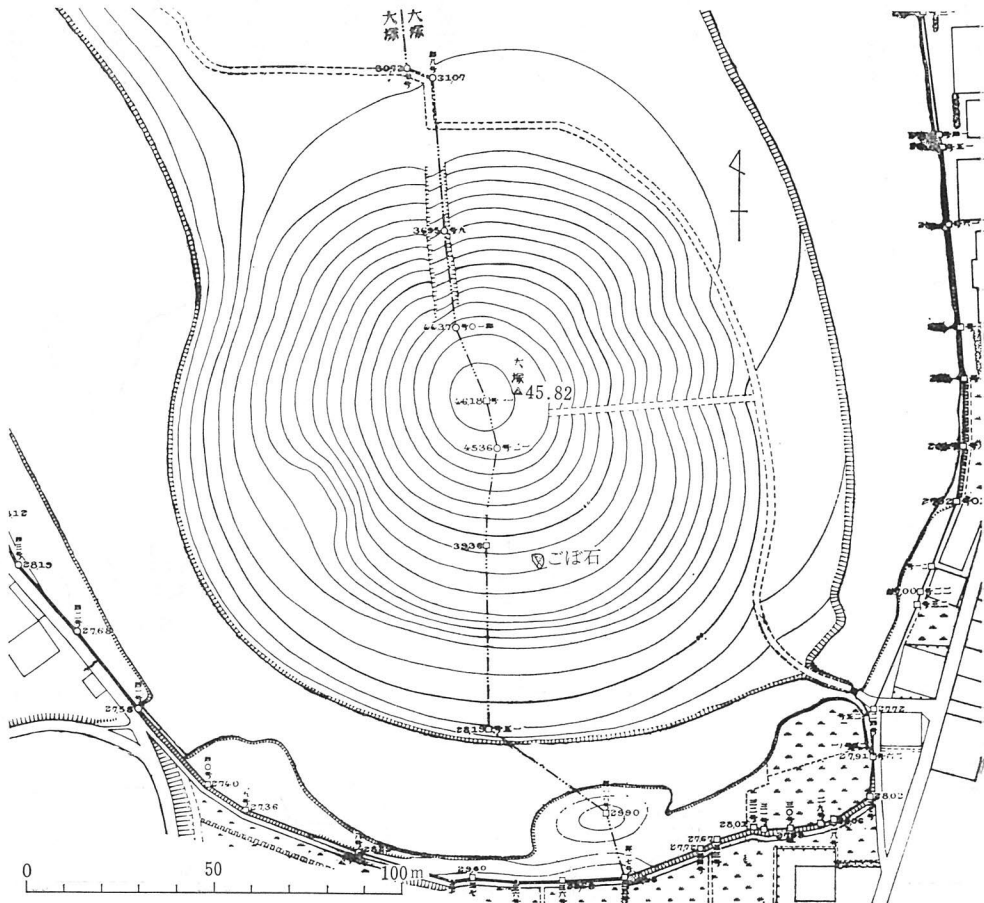
註

- (1) 宋永雅雄『日本の古墳』朝日新聞社 一九六一年
- (2) 上野竹次郎『山陵』山陵崇敬会 一九二五年

河内大塚陵墓参考地の墳丘調査

古市古墳群の中心からやや西に偏して、河内大塚陵墓参考地は位置する。全長は三〇〇メートルをはるかに越える前方後円墳で、主軸を羽曳野市と松原市のほぼ境界沿い、つまり南北方向にすえている。本墳の後円部には、「ごぼ石」、「牛石」、「亀石」などと称される巨石(以下、ごぼ石と称す)が一個露出していることがよく知られていた⁽¹⁾。この石の正確な所在地点、性格等に関する知見を得るために、十一月二十三日から二十六日にわたって調査を実施した。

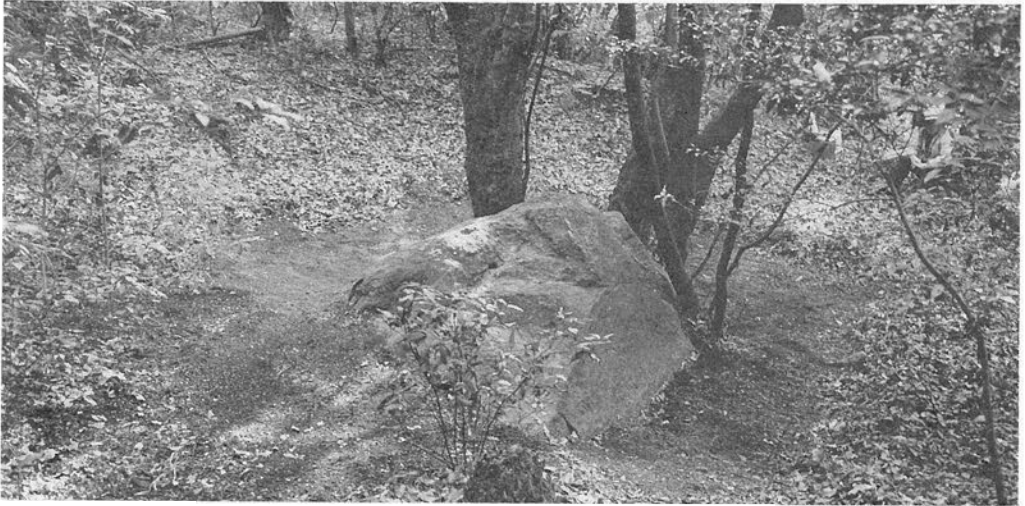
ごぼ石は墳丘のほぼ主軸上、標高三八メートル〜三九メートルのところに、長軸を北西から南東方向に据え、位置する(第10図)。その周辺は、径一三・五〜一四・八メートルにわたり、摺鉢状にくぼんでおり、ごぼ石はその中心的位置に置かれている。主軸に沿って摺鉢状の



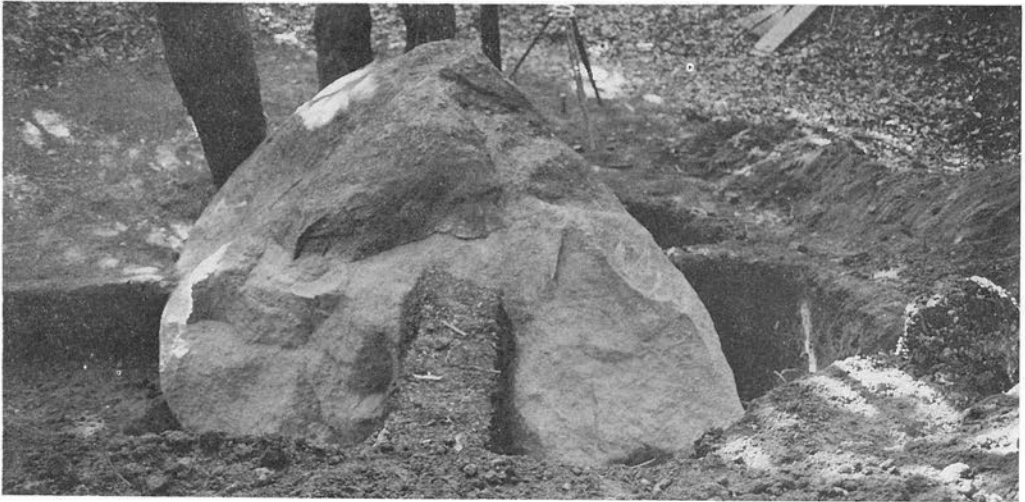
第10図 大塚陵墓参考地調査箇所的位置 (1/2000)



1. 推古天皇陵の大形石材（南から）



2. 大塚陵墓参考地のごぼ石(1)（北西から）



3. 大塚陵墓参考地のごぼ石(2)（北から）